

「忘れられない悲しい記憶」

東日本大震災から8年となった。仙台別院（仙台市青葉区支倉町）で3月8日、東北教区が東日本大震災追悼法要を営んだ。100人が参拝し、犠牲者を偲ぶとともに、復興へ共に歩むことを誓った（写真）。



法要に続き法話した福島県双葉町・光善寺の藤井賢誠住職は、未だに帰ることができない双葉町や同寺の現状などを話し、「8年が経過し、世の中の関心も移り変わっていくが、私たちは忘れられない悲しい記憶を抱え続けている。あの日以来、多くの死や別れに立ち会わせていただき、あらためていのちや故郷の尊さを知るとともに、いづどんな形で人生を終えるかわからないことを思い知らされた。浄土真宗のみ教えをかみしめている」と語った。

東北教区災害ボランティア

イアセンターで2013年から開かれる茶話会「支倉町サロン」で出会った阿部敬子さん(81)、横山吉子さん(82)、杉山幸枝さん(90)は並んで座った。共に震災で家族を亡くし、住み慣れた地から別院近隣に避難してきたという同じ悲しみを抱える。宮城県石巻市から避難した阿部さんは「震災後2、3年は外出することも人と会うことも嫌だった。でも別院さんやボランティアの方々が熱心に茶話会に誘い続けてくださり、今では茶話会でのおしゃべりが一番の楽しみ」と話す。同県東松島市から避難した横山さんは「自分の悲しみを話せる場所があること、同じ悲しみを抱える人たちと出会えて、こうして楽しく笑い合えていることが何よりもうれしい」、仙台市宮城野区から避難した杉山さんは「悲しい気持ちが消えることはないが、今こうして生かされているのちと、この茶話会で出遇った縁を大切にして生きていきたい」と話した。

また、同市若林区荒浜から移ってきた伊藤淑子さん(85)の姿も。「荒浜には仙台市唯一の海水浴場・深沼海岸があり、多くの人で賑わった。あの光景はもう…」と寂しそうな顔を見せた。「でも、震災直後に親戚がすぐに連絡してくれ、横浜から食料を持って駆けつけてくれたことや、ボランティアで多くのお坊さんが来てくださったことがとてもうれしかった。8年間こうして無事に生きていられるのは皆さんのおかげ」と笑顔になった。

茶話会を手伝う別院仏教婦人会の寺田佐和会長(80)は「打ち解けていく中で、震災のことを少しずつ話してくださるようになった。参加してくださった方が笑顔になると、私たちもうれしくなる。悲しみを抱える方々がおられる限り続けたい」と話す。

参拝者には、長野県高山村・光西寺衆徒の眞出智真さんが南三陸町の海産物を肥料に用いたもち米で作った「きずな餅」と、仙台市宮城野区岡田地区の被災者有志で結成された「仙台市編み会・縫い会」が感謝の印にと、支援物資の布で手作りした小物が配られた。